

六花 1



2019

りっかはいとかい

鎮 年 酒 山 田 六 甲

清山の一滴をして年酒かな
三日目の月山見えてゐる雪野
月山を行者ヶ雪の隠しけり
湯殿山晴れわたりたる雪眼かな
御降りの出羽三山を拝しけり
雪中を曲りて青し阿賀野川
塞降る鯖江の町を通りけり
一転して雨から雪へ椿かな
劍岳晴れて落暉に氷りけり
親知らず子不知浪の花ざかり
有珠山もポロトコ山も雪の貌

地吹雪や支笏湖ニセコ苦小牧
雪女出さうな降りにかはりけり
雪女郎の角巻きを解く勇氣なし
雪霧の硫黄にむせてをりにけり
米澤は舌嚙むほどの寒さかな
劍岳夕日にしみて氷りけり
白馬の暮れたる鱒のにぎりかな
終活の手続きならず日向ぼこ
冬の蜘蛛猫のごとくに指に寄る
咳に咳つのり明け方遠くあり
出石蕎麦あとは時雨を待つところ
冬の蜘蛛可愛や指に這せゐて

昨年末、急に思い立ってフェリーで北海道に行った。敦賀港から苫小牧まで20時間、深夜に乗って翌日の夜に着く。退屈なかがり、と人は言うが、船中酔うこともなく読書三昧。

苫小牧に着いて周辺は闇しかなく、オリオンが地表から斜めに体を持ち揚げたように鮮明である。が、一瞥しただけで、苫小牧駅前のホテルを直指して車を走らす。帰宅してその時の情景を詠もうとしたら、オリオンの様子をいいがげんに記憶していたのでしまったと臆をかんだ。そのことが頭を去らず、「もう一度確かめよう」と一週間後再び北海道へ。しかし帰りがいけない。冬の日本海を侮っていた。全長二百五十メートルある巨船でも大揺れで、酔い止めの薬を飲んだ。吐きはしなかったが、本はさすがに読めず。帰宅して「祖父は船酔いしたのだろうか」と欧州旅行の日記帳（1924（大正15）年版ジョン・ウオーカー社製）を見ると、6月31日の日付に「船量いの為何もできず」とモロッコ海峡の状況を書いている。前日は明治天皇祭。ところで英国は6月が31日までであったのだろうか？それとも印刷ミス？。「退屈の極み」とも書いている。六甲が生まれる日の丁度二十年前。もしかしたら六甲は6月31日の生まれかも。祖父の名は大島範次郎。

着陸を待つと旋回島紅葉

「さん」付けて島の神呼ぶ豊の秋

舟小屋にもろぶた並べ干小豆

朝刊は午後の船便秋うらら

海原に落つ一点の秋日かな

漁り火のほつほつ消ゆる夜寒かな

松傾ぐ遠流の島の虫時雨

このみちも七曲りして蕎麦の花

朝霧のほどけ牧牛現はるる

コスモスの風の便りを吾もまつ

高華抄

暮の秋

佐津のぼる

其処此処に花終へぬ草野路の秋
食べ足りぬのか戻りくる稲雀
朝寒や人に会ふため髭を剃り
折り返すバスに客みず刈田道
終章を惜しむ夜長のコンサート
消息がわかり夜長の長電話
長き夜に読み了ふ平家の負けいくさ
日の短か石工のみがく石の肌
畑の屑くすぶりつづく暮の秋
六甲山に冬近き雲重くあり

蟹ひとつ横切る水の落し口

升田ヤス子

稲雀投網のごとく飛びたてり
十六夜や有馬へ旅の夫送り
蟹ひとつ横切る水の落し口
睡蓮の秋冷の色凝らしたる
刈萱の禾のやさしく吹かれけり
陵やにほどりすぐに浮かび来て
菊なます黄菊明りの縁側に

かにひとつよこぎるみずのおとしぐち　ますだやすこ

水の落し口というのだから、田水を落とす口なのだろう。強く流れる水を赤い固まりが何やら動いている。よく見ると沢蟹が流されまいと必死に横へ移動しているのだ。すぐ横には穏やか流れがあるのにわざわざ難儀な落ち口を選んでいる蟹。「ひとつ」といったのは発見して瞬時にそう感じた命の塊なのだ。島木健作の「赤蛙」や志賀直哉の『城の崎にて』の小動物を自らに重ねる主人公の目を思い出す。ヤス子はこのような題材に活路を見いだし始めている。

稻雀投網のごとく飛びたてり

升田ヤス子

稻雀投網のごとく飛びたてり
十六夜や有馬へ旅の夫送り
蟹ひとつ横切る水の落し口
睡蓮の秋冷の色凝らしたる
刈萱の禾のやさしく吹かれけり
陵やにほどりすぐに浮かび来て
菊なます黄菊明りの縁側に

いなすずめとあみのごとくとびたてり ますだやすこ

比喩がすごく佳い。ここに一人の作品を二つ推薦できるのは、主宰として新年から縁起が良いことで、創刊以来、初めてであろう。一時は主宰に評価してもらえないと泣きを入れていたが、ヤス子本来の頑張り魂を花開かせた。結局はヤス子が自らを信じて俳句を楽しむようになったのである。出来すぎた感じがするのでも、もしこの句より先に誰かが発表していたらいさぎよく引つ込めたらいだけである。こんな良い作家がそばにいたとは、灯台もと暗し。

稲燃え上る枯野を見たし火を放て

田尻勝子

小説の着地する場の長夜かな
天心は此処ぞの百合の木の落葉
燃上る枯野を見たし火を放て
実紫あなたの門を家出して
陵の色無き風に匂ひけり
新米や菊池米だよ菊池米

もえあがるかれのをみたしひをはなて たじりかつこ

現実には本人が実行したら放火犯人にな
るが詩では許され、个性的であると称賛
される場合もある。俳句でもなかなかこ
ういうことを許さないが、短歌では可
能。しかし俳句でも主観写生なら田尻勝
子には許している。「それは不公平では
ないか」と批判が出るかもしれないが、
ときどき「えっ」と言うような句を生ん
でくれたらいい。だから、変に俳句の形
式にこだわった手帳の句を出して来た
ら、主筆は機嫌を悪くする。勝子が俳句
的にした句は陳腐に陥ってしまふときが
多い。だから、変に俳句の勉強をするな、
と言っているのである。いわば勝子は反
面教師の役割であり。刺激剤。

雪卿集 せつけいしゅう

升田ヤス子

善野 行

秋湿り岩屋に薪積まれゐて
稲雀投網のごとく飛びたてり
十六夜や有馬へ旅の夫送り
蟹ひとつ横切る水の落し口
睡蓮の秋冷の色凝らしたる
刈萱の禾のやさしく吹かれけり
陵やにほどりすぐに浮かび来て
菊なます黄菊明りの縁側に

月に触れ離るる雲の発光す
長き夜の酒の肴はありあはせ
捨て団扇佳人のバーの棚の端
明日のこと思はず今日の月を待つ
播州の祭の空の高さかな
秋麗やとどまる翼とゆく雲と
新米のもろ手に掬ふぬくさかな
一粒の万倍なれや今年米

住田千代子

志方 章子

いわし雲明石に出船待ちをれば
秋澄めり野鳥が崎を西にして
鵲の二羽来てゐたる絵島かな
秋の蚊を叩きたる手を禊ぎけり
潮の引く橋のたもとの高三郎
秋暑く磯の臭ひのなかにをり
汐匂ふおのころ島の雁来紅
蓼の花横目に港へと急ぐ

間の抜けし口や鬼灯鳴らしみて
平凡の有難きかな秋刀魚焼く
彼岸花咲いて早くもこんな時期
花のやうに生えてをるなり毒茸
毒茸吾を誘ふかに紅差して
待宵の月煌々と身じろがず
台風一過雑草の伸びゐたる
杉玉の茶色くなりし秋の空

藤生不二男

出口 誠

秋草のいづれともなく匂ひけり
鶏頭の辺りの草の刈られけり
木の実降る三つ四つ降る一つ降る
神木の陰おほらかに豊の秋
秋の声かすかなれども定かなる
秋冷の蔓の雫のこぼれけり
高々と取り遺されしの実
白桃のもろ手を垂るるしづくかな

秋祭り雲一つなき空の下
秋の蝶しばらく休みここを発つ
お神輿の前で撮影秋祭り
おみこしは金色なりき秋祭り
いきなりの天狗に笑ふ秋祭り
青空に太鼓のひびく秋祭り
獅子舞の口かくかくと秋祭り
秋祭り久々の酒に少し酔ふ

永田万年青

谷口 一献

新米の掌 赤く塩むすび
新米の炊き上がる頃目覚めけり
新米の匂ひを母の仏前に
新米の一人前のお裾分け
赤帽子むしりて廻す運動会
身に入むや空家の大樹二階越え
みささぎの裾に一輪冬薔薇
枯れ枝の古墳の濠に刺さりをり

酒樽の転がつてゐる秋うらら
蟲しぐれ静寂の夜の酒旨し
青松虫よせめてちんちろりと鳴け
目に入りてタイムスリップ野分中
近々に想ひ出となる新松子
西方へ永き旅路や山粧ふ
冬めきて何時もの猫も何処へやら
めーる来て手紙で返す文化の日

雪樹集

廣畑 育子

赤松有馬守破天龍正義

榎櫃の実小さきに早や疵だらけ

インターを降りて広島走り蕎麦

雨粒を肩に背中に石榴折る

色鯉の連れなし吾も一人かな

猫じやらし黄色い新幹線見付け

鐘咲く歴史街道根の国へ

墓の背ナ流すしりから乾きけり

大山は横目に過ぎて彼岸花

梧桐のトトロ待ちぬしほど長けて

吾亦紅あの頃もつと細かりし

鉦たたき島にしおかげ診療所

夢に来し父との会話菊日和

平居 澹子

田尻 勝子

魚沼の大いなる田よ今年米

小説の着地する場の長夜かな

母の愚痴聞かせる為の温め酒

天心は此処ぞの百合の木の落葉

戻りきて秋思の卓に鍵を置く

燃上る枯野を見たし火を放て

夫の忌の近づかばなほ菊香る

実紫あなたの門を家出して

谿谷の底より見上ぐ星月夜

陵の色無き風に匂ひけり

秋天に流るるばかり笹の尾根

新米や菊池米だよ菊池米

延川五十昭

故郷の宅配便や今年米

小雨降る左近桜や返り花

一片を句集にはさむ返り花

露地裏に端唄聞ゆる帰り花

もの想ふカフェの窓辺の返り花

蹴鞠の声アヤオウと秋の庭



六^り花^か集^し

一月到着順

小林はじめ

改元の予定の年や大旦
初御空わがほゝに映え心地よき
松の秀と有明の月鉾画く
安穩と大書の試筆墨匂ふ
祝箸ちよろぎの紅と対比よし

大内 幸子

雨上り朝な夕なの鹿の声
曼珠沙華赤に限らず白や黄
廃校に獅子の舞来て秋祭
秋霖や高架を伝ふ雫かな
身の丈の生活に昏れて石露日和

螢雪譚

山田六甲



秋湿り岩屋に薪積まれぬて

升田ヤス子

岩屋というのは高貴な人や神がお隠れになる洞穴をいう。淡路島の北の入り口岩屋に恵比寿神が流れ着いて人々が手厚くお世話をしたという伝説が残っている。

月に触れ離るる雲の発光す

善野 行

月に触れて離れてゆく場面で、この

人に詩があるのは、離れるときに雲が光を放っていると感じ取ったところにある。勿論、雲は流れているのである。非常に微妙な捉えかたをして、主宰だけかもしれないが、何か新鮮な感じがする。

住田千代子

いわし雲明石に出船待ちをれば

明石は万葉集時代からよく歌に出て

くる地名。出船とは明石岩屋間をつなぐ汽船で、今は高速船だからあつという間に大橋に下を潜って岩屋に到着。空には秋の雲が鰯の大群のように広がりに沖には何隻かの漁をする船が出ている。おそらく大漁だろうな、と想像を膨らませます。出航を待つ時間の方が航行時間より長い。乗船客は空を見上げたり、港に寄ってくる鵜などを見て待ち時間をつぶす。

間の抜けし口や鬼灯鳴らしみて

志方章子

ほおずきを鳴らす口の様子はまるで間の抜けた顔のようであるという。おそらく自画像の句かと思うが、子どものころの第三者を詠んだものかもしれない。